

2015年度 プロジェクト募集!

現在、次年度同志社ローム記念館を拠点に活動するプロジェクトを募集しています。

学生・生徒・教職員からのエントリーはもちろん、企業・団体からのテーマ提案もお待ちしております。くわしくは事務局までお問い合わせください。

エントリー締切 2015年1月19日(月)

2014年度 最終成果報告会

本年度(第11期)プロジェクトの最終成果報告会・同志社ローム記念館大賞発表会は3月7日(土)に開催します。詳細は決定次第Webサイトでご案内します。



編集後記



この4月より同志社ローム記念館プロジェクトの事務局に着任し、約半年が経過しました。着任当初は右も左も分からず、今も「プロジェクト活動のサポーターとして自分は何をすべきなのだろう。」と自問自答する日々を過ごしています。

これまでの期間、メンバーの中で特に印象的だったのは、授業やレポートで忙しい中、何度も何度も会議を開き、検証を繰り返してイベント準備に取り組む「スタジオZero」メンバーの姿です。時には事務室へ相談に来ますが、どうすれば企画に興味をもってもらえるか、時間配分は適切か、と相手の立場に立って考えている様子が伺え、とても頼もしく思いました。そのように準備を重ね、温めてきた企画の本番をやり遂げたあとの、達成感に満ちた笑顔は輝いて見えましたし、すぐに反省会を開き、次回に活かそうという姿勢にも感心しました。私もそのような学生の姿から学ばせてもらうことがたくさんあり、プロジェクト活動が少しでも円滑にすすめるようサポートしたい!という気持ちがどんどん高まっています。ローム記念館プロジェクトとは、共に過ごすメンバーと切磋琢磨しお互いを高めあう場所。そして、そんな学生たちに刺激され、私自身も必ず成長できる場所だと確信しています。

(同志社ローム記念館事務局 川上めぐみ)

表紙の人

みつい ちか
三井千佳さん

同志社大学理工学部
情報システムデザイン学科3年次生
「ポータブルラボ」所属

社会に出ることを意識した時、自分には何かを「つくる」という経験が足りないと感じた。学科で学んだことを活かしつつ、自分のスキルとして何か残ることをしたい、とプロジェクトに参加。プログラム班の一員として活動している。

春に行われたメンバー向けの「ウェイクアッププログラム」にもすべて参加し、積極的に取り組んだ。写真はウェイクアッププログラムでのワークショップの様子。

プロジェクト・サポート 募金のお願い

学校法人同志社 総長 大谷 實
理事長 水谷 誠

学校法人同志社は、同志社大学ならびに同志社女子大学を中心とした法人内各学校が一致協力して同志社ローム記念館でのプロジェクト主義に基づく新しい教育・人材育成を積極的に進めています。また、これまで現代GP申請による補助金獲得など学外資金を積極的にとりいれるべく努力をしております。この同志社独自の新しい教育・人材育成事業を発展的に展開させるために、教職員をはじめ広く社会、市民のみならず皆様からご支援をお願いすることとし、プロジェクト・サポート募金を実施しております。皆様方におかれましては是非ともご賛同いただき、ご協力のほどよろしくお願いいたします。募金のパンフレットおよび詳細につきましては、大学京田辺校地総務課(ローム記念館事務局)にお問い合わせください。募金は、大学資金課、女子大学経理課、各校事務局でも受け付けます。

同志社ローム記念館 プロジェクト・レポート

DIR

[ディー・アール]

Vol.22
October 2014

「プロジェクト熱」高まる。
2014年度 プロジェクト活動レポート



「プロジェクト熱」 高まる。

第11期のプロジェクトは5チーム、約140名のメンバーが活動に取り組んでいる。チーム数は少ないが、プロジェクトルームがあるこのフロアの熱の高さは変わらない。見渡せば、ライバルたちが今何をしているか、具体的な活動もお互いによく見える。ローム記念館とともに活動する仲間であり、ライバルでもある、そんな関係が持てるこの環境がお互いを高めあうひとつのしかけになっている。

Pick up!

2014年度 プロジェクトメンバー

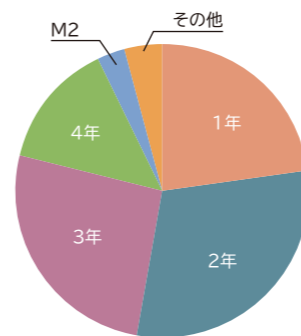
チーム数は少ないものの、メンバー数に大きな変化はない。選考段階で検討に検討を重ねたプロジェクトの企画。しっかりメンバーを集めてみんなで高めあわなければ当初の目標は達成できないのである。活動期間も半分が過ぎ、中心となって活躍する2年生の姿も頼もしい。学部学年の垣根を越えて、ますます高い目標に向けてがんばってほしい。

2014年度 プロジェクトメンバー数

学年別

1年	33
2年	43
3年	37
4年	19
M2	4
その他	6

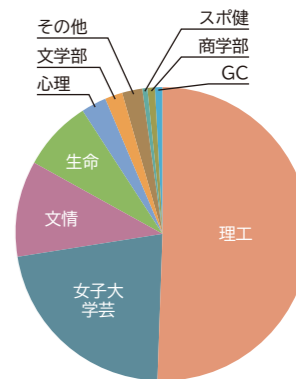
合計 142名



学部別

理工学部	72
女子大 学芸学部	31
文化情報学部	15
生命医科学部	11
心理学部	4
文学部	3
スポーツ健康科学部	1
商学部	1
グローバルコミュニケーション学部	1
その他	3

合計 142名



Pick up!

ウェイクアッププログラム 5月8日(木)～5月30日(金)

今回のウェイクアッププログラムの企画スタートは3月末。事務局スタッフの呼びかけで急速「スタジオZero」メンバーが集められての企画ワークショップで幕を開けた。プログラムは全部で5つ。例年委員会や事務室主導で実施されてきた取り組みだったが、今回はスタジオZeroが主催者側へ。準備から実施まで、息つく間もない長い長い5月になった。学生がつくる学生のためのプログラム、その苦勞の甲斐あって新しくローム記念館にやってきたメンバーたちにも「ローム記念館プロジェクト」が何なのか、肌感覚で伝わったようです。チームの中で自分がやるべきことを考え、早々にプロジェクトルームに自分の居場所をつくることができたようだ。

- 5 / 8 (木)・13 (火) プロジェクトガイダンス
- 5 / 10 (土) ポスター制作ワークショップ
- 5 / 15 (木) 会計責任者連絡会
- 5 / 23 (金) コミュニケーションワークショップ
- 5 / 30 (金) プロジェクト交流会



のめりこむ、 3ヶ月。

新たなチャレンジと 連続

2014年度 プロジェクト活動レポート

今号では、ローム記念館事務室やスタジオZeroに寄せられる「プロジェクトってどんな感じですか?」というご質問にお答えすべく、本年度活動しているプロジェクトの状況を一挙にご紹介したい。

2015年度のプロジェクトエントリーの受付もはじまっているので、今年度のプロジェクトの様子も参考にしながら、ぜひ次年度以降のプロジェクトにチャレンジしてほしい。

プレ・プロ<春> 「インタラクティブ・インスタレーションをつくる」

今回のプロジェクトは、共通のテーマの下でそれぞれが問題を発見し、解決していくというスタイル。ある特定の問題が設定され、その問題解決のあり方、結果の優劣を競いあうのではなく、アートと技術の融合で「新しい行為と感覚の体験」を提供する展示を準備、実施することが着地点だ。

前半は、Processingやセンサー、制作するフィールドを理解するための講義が中心のプログラム、後半には2人1組で作品制作に取り組んだ。毎週、どんどん新しいことに挑戦していくプログラムはハードだけどおもしろい。最初はプログラミングへの不安が大きかったメンバーからのコメントも、回数を重ねるに連れ「自分の思いや理想の動きを表現することの難しさを痛感!がんばりたい!」「自分が役に立つためにはもっと勉強してから臨まなければ!」「なんとか形になってきた!もう少しきれいな動きにしたい!」と、どんどん前向きなものが増えた。

メンバーはこの3ヶ月でプログラミングスキルだけでなく、ユーザの感覚や感情に寄り添って作品をかたち作っていくという体験、ひとつひとつ高いハードルをクリアしていく達成感など、プロジェクトに関わるさまざまな気づき、学びを得た。この経験を活かしてローム記念館を拠点に活動するメンバーとしてさらに活躍してくれることを願う。



プレ・プロ<秋>スタート

今年スタートした新たな短期プロジェクトのしくみ「プレ・プロジェクト」。
第1期となった「プレ・プロ<春>」では、「インタラクティブ・インスタレーションをつくる」をテーマに、3ヶ月のプロジェクトが展開された。
第2期となる秋のプレ・プロジェクトは「新しい『文具』の企画」がテーマだ。プロジェクトを進めていく上で必要なベースのスキルを学ぶとともに、文具をテーマに企画立案を体験する3ヶ月。秋学期のはじまりを待たずして、定員を超える参加申込があり、今後の展開が楽しみだ。このプレ・プロでの経験が新たなプロジェクトの種となることを期待したい。
メンバーや講師の有賀妙子先生(同志社女子大学学芸学部情報メディア学科教授)、プレ・プロ<秋>講師の土屋誠司先生(同志社大学理工学部インテリジェント情報工学科准教授)のインタビューは広報誌「ippo」No.33にも掲載されているのであわせてご覧いただきたい。



ものづくり体験イベント「Hack U 同志社ローム記念館」 8/8(金)~9/2(火)

ヤフー株式会社の協力により開催された開発コンテスト。夏休みを利用しての開催となったが、12チーム42名のメンバーが参加した。
途中、2回の技術相談会もあり、ヤフー株式会社社員の方にチューターとしてサポートしていただきながら、約3週間、チームでの開発に取り組んだ。
9月2日の発表会では、スマホアプリ、Webサービス、ゲームなど、それぞれの開発成果が発表された。3分間という短い時間での発表であったが、それぞれに工夫があり、多彩なプレゼンテーションで大いに盛り上がった。受賞チームと作品は次のとおり。



最優秀賞:「ヒトリス」 チーム名:りんごちゃん

Kinectを使って人の動きで操作するテトリスを開発。人間がブロックに合うように形を変え、うまくブロックとマッチングが取れると人間ブロックとなって落下する。見ていて楽しくなるものをテーマにつくられた作品。



同志社ローム記念館賞:「DOORS+, RKP」 チーム名:L*man Brothers

同志社大学の図書館で本をスムーズに見つける、科目履修の悩みを減らす、といった学生生活を便利にしてくれるサービスを開発。リアルな学生の悩みを表現したムービーを使ってプレゼンテーションを行った。



Happy Hacking賞(参加者相互評価による賞):「ヒトリス」(チーム名:りんごちゃん)

RoCoP (Robot Contest Project)

ロボコンへの出場準備本格始動

NHK大学ロボコンでの優勝を目指して活動を進めている「RoCoP」。春からは、大会出場に備えてさまざまな技術の勉強会、講習会を行う傍ら、モノづくりの現場はもちろん、日頃の生活でも大切にしたい「安全」に対する意識向上の取組としてポスター制作を行うなど、こつこつと地道に活動を進めている。

昨年度のプロジェクト「ROBOX」として臨んだ2014年の大会ではビデオ審査で敗退。同志社ルーム記念館プロジェクトとしては、過去に一度チャレンジしたことがあるものの、今のメンバーにとっては初出場、とまどうことも多かったようだ。

悔しい気持ちを抱えて6月1日に開催されたABUアジア・太平洋ロボコン代表選考会を見学したメンバー。次はあの舞台に立ちたい!という思いを強くした。

2015年の大学ロボコンのテーマは「バドミントン」。競技ルールも8月末に発表され、10月までには戦略づくり、年内には一旦の機体完成を目指し、いよいよ大会に向けた活動も本格化する。

設計・製作を担当する安光 諒さん(同志社大学理工学部2年次生)は、「ロボコン出場に必要な基本的な機構は理解できている。自分たちで考えた戦略をもとに、新しく必要となる機構や技術をできるだけ早くマスターして機体づくりに活かしたい。全力でがんばるのみ!」と大会への意気込みを語る。



ROBOX

身近にロボットがいる社会に向けて

第1期より脈々と続く「ロボット」プロジェクト。

「ロボットを身近な存在にしたい」と活動を始めた「ROBOX」では、制作するロボットのコンセプトづくりに頭を悩ませる。

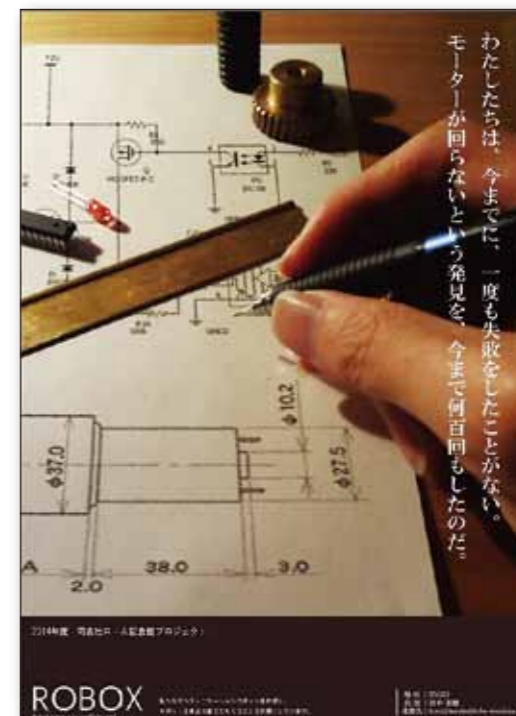
メンバーにとっては、幼い頃からロボットは憧れであるとともに、身近な存在。そんな自分達が創り出せるロボットとはどのようなものか。

今回取り組むのは「交流会でのコミュニケーションを促進するごあいさつロボット」。

あいさつを交わし、名刺交換をする。「この場にロボット?」と一度は怪訝な顔をした人も、緊張しながら交流会に参加した人も、ロボットとの対話を通じて少し気持ちが和む。また、そんなロボットとの出会いを人同士の会話のきっかけに、交流会を盛り上げることに貢献する。

楽しい想像は膨らむが、その実現には難関も多い。「人に近づく」「握手を求める」「名刺を渡す」・・・人間社会ではよく見られる当たり前の動作だが、ロボットがそれぞれの行為をスムーズに行うための機構もプログラムもそう簡単ではない。

「たいへんなことはいろいろあるが、僕はかっこいいロボットをつくりたい。外装にもこだわり、アルミだけでなく、これまで使ったことのない新しい素材の加工にも挑戦して、これまでになかったロボットを目指す。」と語るのは、自身も高校時代からロボット部でロボットづくりに携わってきた磯部 貴之さん(同志社大学理工学部2年次生)。本年度のロボット完成を目指し、急ピッチで活動は進む。



ポータブルラボ

AR技術で実験を身近に

「同志社ローム記念館らしいプロジェクト、やってやろうじゃん。」ベテランメンバーばかりが立ち上げたチーム。数年前から注目されるようになった「AR(拡張現実)」の技術もどんどん進歩している。「ポータブルラボ」が目指すのは、AR技術を用いて理科の実験をタブレット端末で行う「手のひらの実験室」。

当のプログラミングが進んでなくてヤバイ。原因がわからなくて、勉強しているんですが、勉強すればするほど深みにはまっていく気がします。」7月に入った頃はそんな声も聞かれた。いくつも、何度も壁にぶつかりながら、「電気分野」の実験の基本的な枠組の開発と、そこに載せていく実験のコンテンツづくりを進め、なんとかスケジュールどおりに第1弾のアプリのリリースにこぎつけた。楽しく実験できるだけでなく、解説と実験、その内容のテストまで、アプリ内で学習を完結

させるよう組み立てなおしたという。どこでも手軽に楽しく、遊びながら実験をすることで、こどもたちに理科への親しみをもってもらいたい!プロジェクトを立ち上げた当初からのその思いを大切に、更なる改良版の制作に臨んでいる。完成版は、「力学分野」も取り入れたものになる予定だ。



macho編集部

女子大生のキャリア実現ってなに?

プロジェクトスタートから半年、フリーペーパー「macho(マチョ)」は創刊2号を数える。「女の子が手に取りたいくなるステキなフリーペーパーをつくりたい」という思いからスタートしたプロジェクト。「他にはないフリーペーパーとは?」「私たちだからつくれるフリーペーパーとは?」...選考段階で何度も話し合っ決めてテーマは「女子大生のキャリア実現のきっかけをつくる」。

内面的な力強さを意味する「macho」を誌名に決め、テーマに沿ったコンテンツを揃えるべく企画会議を重ねて表紙を含め全16ページの誌面を作りこんでいく。活動を始めると、「つくる」こと以外にやるべきことが想像以上に多くて驚いた。メンバーは総勢23名と大所帯だが、営業、制作、Webの3班を編成し、この半年、息つく間もなく活動を進めてきた。「フリーペーパーづくりは何もかもがはじめて。最初は自分達の知識の範囲でし

か動かせませんでした。手探りで活動を続けているうちに少しずつ人のつながりができ、取材対象の方をはじめ、営業先の企業の方、卒業生の方、先生など、いろいろな人たちに助けられてスキルアップし、活動スタイルも自分達のものになってきました。」と語るリーダーの清水 佑穂さん(同志社女子大学学芸学部情報メディア学科2年次生)。今期中に4号の発行を目指し、今もローム記念館で行う講座の準備に追われる。学生が作るフリーペーパーのコンテスト「Student Freepaper Forum」への出展も控え、「macho」もメンバーも、ますますの成長が見られそう。



プロデューサー養成プロジェクト@木津川市

大学生レベルにこだわる

木津川市内の5つの市立中学校の中学生チームと一緒に、「5年後の木津川市」のプロデュースに取り組んでいる。中学生は総勢50名で、15名の学生メンバーが交替で中学校に出向き、放課後の活動を展開。各校チームのアイデア、意見をまとめ、12月にイオンモール高の原で提言発表を行う予定だ。

ほんの数年前までは中学生だったメンバーだが、大学生となった今、活動をリードする立場で中学生と関わる中で悩むことも多い。事前に綿密に活動のプランを組み立てるが、思いどおりにならないことも。「どうしたら伝わるか」「ディスカッションをうまく展開するにはどうしたらいいか」…。

さらに、メンバーには、「プロデューサー」の視点が求められる。中学生のアイデアをもとに、新しい価値として社会に認めてもらえるような企画をまとめてあげたいが、ともすれば目の前の活動を何とかまとめることだけに執着してしまう。新規性や社会への貢献度など、自分達が納得できる「大学生レベル」



の視点を常に意識しつつ、チームでの「プロデュース」に臨む。8月21日には、5校全チームが同志社大学に集まり、企画書作成の途中経過を発表し合って外部評価を受けた。当日の司会進行を担当した下村 郁佳さん(同志社大学文化情報学部1年次生)は、次のように語った。「中学生メンバーをリードしていく上ではいろいろな視点でアプローチすることが必要だとアドバイスもらった。そのためには私たち自身がいつもとは違う視点を持てるようにならなければ。毎回の活動のシミュレーションも最初に比べればできるようになってきたが、バリエーションが足りない。『きっとこうなるだろう』と決め付けず、メンバーそれぞれの視点をみんなで共有し、たくさんのバリエーションを持てるようにしていきたい。」メンバーのますますのがんばりに期待したい。



スタジオZero

プロジェクトの成功を実感せよ

スタジオZeroの発足から約1年半。館内で活動するプロジェクトに寄り添い、委員会や事務局と連携して、プロジェクトがよりよい成果を上げるための企画、環境づくりを担う。他のプロジェクトのように単年度での成果を求められるわけではないが、その分、常に走り続けているチームだ。

新メンバー募集(新歓)活動が始まったのは年明けすぐ、さらにウェイクアッププログラムの企画も加わって走り続ける1年が始まる。スタジオZero自体のメンバー獲得、育成も重要で、独自に新メンバーを迎えての企画会議兼交流の合宿も実施。そこで立ち上がった企画が「同志社ルーム記念館プロジェクト杯」だ。

イベントも広報誌「ippo」の制作も、企画ごとに統括と主担当を決め、スケジュールをこなしていく。1年間で、いくつものプチプロジェクトをまわしていくのがスタジオZeroの活動スタイルだ。それらの小さなプロジェクトの成功を実感できてこそ、他のプロジェクトの思いや悩みもわかるというもの。目標設定の難しさも、目的を見失わないように運営していくことの大変さも、規模は違えどZeroのメンバーもしっかり経験して噛みしめる。常に他のプロジェクトをリードし、支えになるためには、自分達自身がしっかりしていなければならない。昨年度受賞した特別奨励賞を糧に少しずつ成長し、同志社ルーム記念館プロジェクトの運営に欠かすことのできない学生チームとなっていく。



Pick up! 同志社ルーム記念館プロジェクト杯 6月28日(土) 多々羅キャンパス体育館

何度も話に出ては実現しなかったメンバー対象のスポーツ系イベント。スポーツを通してプロジェクト間の交流を、とスタジオZeroが企画、ついに開催されることとなった。参加者は約30名、3チームに分かれて10種の競技で得点を競い合った。





ステップアップキャンプ

毎年恒例となっている「ステップアップキャンプ」。今年は「伝える」をテーマにスタジオZeroがプログラムを企画・運営、メンバーの約半数となる70名が参加した。

1日目は、あらかじめ考えた自分自身をあらわすキーワードを使って自己紹介をする「キーワードゲーム」からスタート。プロジェクト混合チームで編成されたチームごとにワークに取り組んだ。

与えられた条件、情報から事件のいきさつと犯人を推理する「推理ゲーム」、チームワークと交渉力が問われる「トレーディングゲーム」が行われ、おおいに盛り上がった。

パーベキューは突然の雨に見舞われたが、その後の交流会でもプロジェクトの枠を超えて交流がはかれ、楽しい時間をすごした。

2日目は、プロジェクト単位での活動が中心で、朝一番は、ランダムに引いた「場面」「感情」ふたつのキーワードをジェスチャーで表現する「サイレントゲーム」で幕を開けた。

言葉で表せない分、わかりやすいストーリー設定を考え、表情、体全体を使って懸命に表現。眠さを吹き飛ばす楽しいプログラムとなった。

その後は、今後の活動に向けて、「プレ中間報告会」、同志スクローパー祭での企画発表など、ライバル同士ながらお互いの活動を高めあう場となった。プロジェクトの目的や当面のスケジュール、目標、自分のタスクなど、あらためて確認することができ、秋に向けてますます活発に活動が展開されそうだ。



OP (Old Project-Member) 訪問

「同志社広告機構(DC)」 (2006年度・2007年度)



Vol.10からスタートした「OP訪問」企画ですが、今回は、過去に活動したプロジェクトチームのその後も注目してみよう。

「同志社広告機構(DC)」は、当時経済学部2年生だった男子学生5人が立ち上げたプロジェクトで、ショートムービーで学生のモラル低下の抑制、社会マナーの向上の啓発活動を行いました。ムービーに登場した「ニイジマン」はキャンパスでも話題に。図書館のマナー向上のためのムービー制作を受託したり、ラジオや新聞、テレビでも取り上げられたりと、注目のプロジェクトになりました。

さて、そんな同志社広告機構のメンバーも30歳になり…

今回、インタビューに協力してくれたのは、前田堅介さん(製鉄会社勤務)、三上泰斗さん(酒類・食品メーカー勤務)。お仕事の合間を縫ってお答えいただきました。

— 当時、経済学部2年生だったみなさんですが、プロジェクトをはじめるきっかけは何だったのですか？

毎日の生活にマンネリ感がありました。このままではあっという間に大学生活が終わってしまうという危機感をみんな感じていた時期にプロジェクトの募集を見つけたのを覚えています。

そこからはみんなで何をしたら採用されるのか、一緒に一晩中考えたり、谷村先生(プロジェクト責任者の経済学部 谷村智輝先生)に相談しに行ったりして、「同志社広告機構(DC)」というカタチになりました。「DC」というネーミングもよかったなあと思っています。

— 元気がよくてノリのいい同志社広告機構(以下DC)のメンバーは選考の段階から目立っていました。そして、活動がスタートしてもまもなく、「ニイジマン」が誕生してますます注目されるのですが。



ニイジマンは僕が担当した1作目で登場します。テーマは「タバコのポイ捨て禁止」でした。いきなり堅いテ

マだったので、とにかく学生の注目を引くためにみんなと相談した結果が「戦隊モノ」だったんです。

あとはホントにノリでつくっていききました。僕がニイジマンになるつもりは全くなかったんですけど(笑)。みんなあのコスチュームを着てくれず、1作目の担当で、とにかく完成させないといけないと思っていた僕がやむなく着た、というのが本当の所です。

まさか、あんなに続けることになるとは、最初は思ってもみませんでした!



OP (Old Project-Member) 訪問



— DCの作品は毎回楽しみでした。数分のムービーですが、ムービー制作も初心者でしたので作るプロセスでも苦労があったと思います。よくみんなでマルチメディアラウンジに通っていましたね。さて、そんなDCですが、今でも付き合いは続いていますか？

住んでいるところは関東、関西で半々（1人は現在インドネシア!）ですが、年に2、3回は集まっていると思います。



それぞれの道を行っていますが、DCの話になると、みんな大学時代にタイムスリップするんです。

今年は実現できていないのですが、毎年「DC旅行」があって、みんなで休みをあわせて旅に出る企画も続けています。

— 離れていても、「仲間」の関係は続いているということですね。

メンバー間の結束の固さは健在です。みんなが、「とにかくなにか、大学に自分達の足跡を残したい」という想いを持っていて、プロジェクトで一緒にがんばった時期があったからだと思います。

自分にとってのDCメンバーは無くしてはならない無二の存在です。何かにつけて会おうとしている感じですね。このメンバーに会うと、仕事でグロッキーになっていたも初心に帰れるというか、そういう所がありますね、真面目に考えてみると。(笑)

— プロジェクトが、ずっと続く仲間をつくる場になったことをうれしく思います。仕事に子育て…忙しい毎日追われる中で、時々集まって、昔と変わらず遊べる仲間がいるのは幸せなことですね。ぜひみんなでローム記念館にも遊びに来てくださいね！



Event Report

イベント報告

2014年4月～
2014年9月

同志社ローム記念館プロジェクト
プロジェクト交流会
4月17日(木)



同志社よさこい×そでふれコラボ企画!!
「しぶ朗」

6月25日(水)
主催:「よさこいサークル よさ朗」・「京炎 そでふれ! 志舞踊」



同志社ローム記念館プロジェクト
「プロデューサー養成プロジェクト@木津川市」
「木津川市プロデュースプロジェクト合同ミーティング(中間発表)」
8月21日(木)



「Hack U 同志社ローム記念館」発表会

9月2日(火)
主催:同志社ローム記念館プロジェクト運営委員会
協力:ヤフー株式会社



● イベント

「合気道部」新歓演武
4月2日(水)

「同志社大學応援団」演舞
4月2日(水)

「京都よさこい連 心粋」演舞
4月3日(木)

「同志社交響楽団」新歓田辺アンサンブル
4月14日(月)

京田辺水曜チャペル・アワー「逝去者追悼礼拝」
4月23日(水)
主催:同志社大学 キリスト教文化センター

第56回プロデュース・テクノロジーフォーラム
「福島から考える 震災復興プロデュース
～地球規模の気候変動への日本の挑戦～」
元環境省事務次官 南川秀樹氏講演・ディスカッション
4月26日(土)
主催:特非)プロデュース・テクノロジー開発センター

B-girls×girls band4th ダンスパフォーマンス
5月22日(木)
主催:同志社女子大学 現代社会学部現代こども学科 上田信行ゼミ

Doshisha Spirit Week2014春 ー同志社大學応援団ー
6月9日(月)
主催:同志社大学 キリスト教文化センター

インターンシップガイダンス
6月10日(火)
主催:同志社大学 キャリアセンター

TOEIC説明会～今、英語力が求められている理由～
6月17日(火)
主催:同志社大学 国際化推進室

第57回プロデュース・テクノロジーフォーラム
「歴史で地域活性化! 今話題の戦国時代プロデュースの仕掛けに迫る」
戦国魂プロデューサー鈴木智博氏講演・ディスカッション
6月21日(土)
主催:特非)プロデュース・テクノロジー開発センター

「もっと世界へ! 青年海外協力隊のすべて」
6月23日(月)
主催:同志社大学 京田辺校地学生支援課

「くるりん発表会」
6月24日(火)
主催:同志社ローム記念館プロジェクト「ROBOX」

第6回コモンスカフェ ～グリーンエネルギー風力発電の可能性～
6月25日(水)
主催:同志社大学 学習支援・教育開発センター

同志社大学 2014年度プロジェクト科目春学期成果報告会
7月27日(日)
主催:同志社大学 プロジェクト科目検討部会

2014年度 同志社ローム記念館プロジェクト
中間報告会
9月27日(土)
主催:同志社ローム記念館プロジェクト運営委員会

● 展示

フォーミュラカーの展示
4月1日(火)～
主催:同志社大学 機械研究会

同志社エコプロジェクト (DEP) 活動報告ブース&うちわ配布
7月10日(木)～7月25日(金)